

# 伝え継がれる職人の技

## 白根仏壇 ~職人の魂が込められた仏壇~

### 白根が育んだ伝統的工芸品

300年の歴史を有する白根仏壇は、1980（昭和55年）年に通商産業大臣（現・経済産業大臣）から指定を受けた伝統的工芸品です。

その歴史をひも解くと、江戸時代中期に宮大工の初代長井林右エ門が、京都の技術・技法を取り入れて京形の仏壇を作り、独自の彫刻を施した「白木仏壇」を考案したのが始まり。天明年間には白根独特の技術と技法が生まれ、分業化の生産体制が確立されました。

「安政3年には、中ノ口川を通じて新潟港まで仏壇を運び、東北地方に出荷していたそうです」と語るのは、伝統工芸士（漆塗・箔押部門）の資格を持つ笹川徳英さん。「白根が仏壇の産地として栄えたのは、生産体制や流通が早くから確立していたということに加え、昔から多くの水害に見舞われてきた白根の人々の、仏に祈る気持ち、信仰心の強さが背景にあるのでは」と語ります。

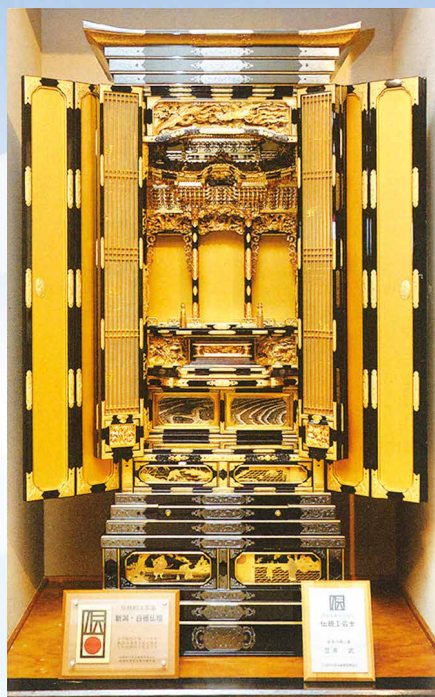
### 脈々と受け継がれる技と誇り

白根仏壇の制作工程は、木地・彫刻・金具・塗箔・蒔絵の5部門に分業化されていて、各分野専門の職人たちの高度な技術が合わさって、一つの仏壇が出来上がります。

技が特に集約されているのが、仏壇の生命ともいわれる宮殿（屋根）。内部は驚くほど繊細な造りで、豪華な仕上がりになっています。「宮殿は寺院の内陣を模倣して作られています。少しでも寺院に近づけるために、漆や金箔などを使って豪華に仕上げているのです」。また、宮殿は「平枱型」という独特な技法が用いられ、解体と組み立てが容易にできるのが特徴。これによって仏壇の洗濯が可能になり、解体して補修や塗りを施せば、100~200年後でも新品同様によみがえるといいます。

「白根仏壇の伝統を将来に伝えるためには、産地が一体となって後継者を育てることが必要です」というように、組合では若手職人に技術指導を行うとともに、伝統工芸士の資格試験を実施するなど、後継者の育成に力を注いでいます。一方では現代に合わせた新しい仏壇の研究や制作など、新たな試みも進めているところです。

300年という歴史を積み重ね、伝統工芸品となるほど、その価値を高めてきた白根仏壇。伝統に培われた高い技術とともに、「良いものを作りたい」という職人たちの熱い思いと誇りは長く受け継がれていきます。



新潟・白根仏壇には伝統マークを使った伝統証紙が貼られています。



漆塗りに使う道具の数々



300年の技術の結晶、宮殿（くうでん）

■問い合わせ／  
白根仏壇協同組合（白根商工会内）  
TEL 025-373-4181

### 刀匠の技—月潟手打鎌

月潟鎌は、厚鎌、薄鎌、小鎌と幅広い需要層に、その切れ味と耐久性が評価、愛用されています。

その発祥は、江戸時代の中ごろ、天明年間（1781~88年）に刀鍛冶であったが農鍛冶の仕事もした「薄田沖右衛門」が、そして、文化年間（1804~17年）には「薄田周平」が黒鳥村（現新潟市西区）から移り住み、鍛冶を始めた事を起源とすると伝えられています。

現在は、近隣市町村を合わせて30企業ほどが手打鍛造と鋼付けの技法を守り、需要家の注文に応じ特殊な物まで各種製造。鎌の総合産地として金物の町三条市を中心とする産地間屋を経て、関東・東北をはじめ全国各地に流通し、高い評価を受けています。



### ひょうたん・しめなわ（味方）

独特の愛らしい形をもつひょうたん。味方地区の「愛瓢会」では、このひょうたんを利用して飾り物を作成。手ごろなお土産として好評です。

正月飾りに欠かせない、しめなわは、青刈り稲の色と香りをそのままに、一つ一つ手作業で作られます。



### まゆ玉（月潟）

越後の冬の縁起物、まゆ玉飾りは、焼いたもち米の型に食紅で色を付けたもので、古くから小正月の縁起物として、家庭の座敷などに飾られてきました。枝につるされたまゆ玉を見ながら、商人は商売繁盛、農家は五穀豊穡を祈ったといいます。



### クロスアツブ 5

### 越後しろね絞り

~復活を遂げた、鮮やかな藍~

かつては日本三大絞りの一つに数えられ、新潟市無形文化財に指定されている越後しろね絞り。白根の地で絞りが行われるようになったのは江戸時代といわれています。その後、生産額が増加し、明治後半、隆盛期を迎えたものの、世界恐慌や第二次世界大戦などの影響で、徐々に消滅していきました。昭和63年、市民グループの手によって復活し、今もその高い技術が伝承され続けています。しろね絞りはしろね大凧と歴史の館（P.13）で見ることができます。

